

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。今年も残すところ、あと3週間ばかりとなりました。受験生にとってはまさに天下分け目の時期ですね。とはいえ無理は禁物。特にこの時期、風邪なんか引くともつたいたないことになりますから、体調管理には十分注意してほしいと思います。

さて、それでは解説をはじめていきましょう。今回の取り上げた東大日本史の第4問は「**欧化主義への反発と国民意識の高揚**」についての問題でした。最近も北方領土問題や尖閣諸島問題で他国との摩擦は絶えませんが、外交問題が紛糾すると国民意識(ナショナリズム)が刺激されるというのは、理解しやすい構図かもしれませんね。さらに今回の問題は2010年度に出題された中でも、取り組みやすいものであったと思います。例えば、年表にある

徳富蘇峰 民友社 『国民之友』

→**平民(的欧化)主義**

三宅雪嶺 政教社 『日本人』

→**国粹(保存)主義**

は、なんだか受験の方程式(?)のように見慣れたものですよね。ただ、それらを知識として覚えてはいるものの、いざその内容を問われると詰まってしまうのかもしれませんが。しかし、今回の問題はしっかりと誘導がありますので、問題文を丁寧に読み進めていけば(東大の問題の基本ですね)、おのずと解答ができあがったのではないのでしょうか。

<欧化主義への反発と国民意識の高揚>

問題文

明治政府は、条約改正交渉を担当した井上馨を中心として、法律・美術・社交・生活習慣といった幅広い分野での欧化を促進した。これに対して、1887年頃には政治と文化の両面で、欧化主義への反発が方向の違いをふくみながらあらわれた。このような反発の内容と背景を、下の年表を参考にしながら、6行以内で説明しなさい。

問われているのは「このような反発の内容と背景」ですので、まずは「このような」の内容を正確に把握しなければなりません。問題文では、「明治政府は…幅広い分野での欧化を促進」とあり、そして、「1887年頃には政治と文化の両面で、欧化主義への反発が…あらわれた。」とあるので、「このような反発」が「欧化主義への反発」であり、さらにはその欧化主義が「法律・美術・社交・生活習慣といった幅広い分野」にわたって展開されたことは容易に読み取れます。

では、何故「欧化主義への反発」が現れたのでしょうか?ここで注目したいのは問題文にある「条約改正交渉を担当した井上馨を中心として」という一節です。

(1) 欧化主義への反発—井上馨の外交—

井上馨外務卿(のち外務大臣)は1879(明治12)年から1887(明治20)年までその職にあり条約改正の任にあたりました。井上は法権(領事裁判権)・税権(関税自主権)の一部回復を目指して、まず1882(明治15)年に東京で列



井上馨
(1835~1915)

強者の戦略

国共同の条約改正予備会議を開き、その結果に基づいて 1886 (明治 19) 年から翌年にかけて正式交渉を開始しました。その案の要点は、

- ・ 2 年以内に外国人に内地を解放する
- ・ 営業活動や旅行・居住の自由を認める (内地雑居)
- ・ 外国人判事の任用
- ・ 西洋風の近代諸法律を 2 年以内に制定する

などを条件にして、領事裁判制度を廃止し、輸入税率を引き上げるというものでした。

そして、井上はこの交渉を成功させるためもあって、いわゆる欧化政策をとり、盛んに欧米の制度や風俗・習慣・生活様式などを取り入れ、その模倣につとめて、欧米諸国の関心を引こうとしました。

特に欧化の象徴として建設された鹿鳴館^{ろくめいかん}では連日のように政府の高官が内外の紳士・淑女を招待して西洋式の大舞踏会を



開いたそうです。しかし、その欧化政策は極端で、迎合的で、表面的であるとの批判もあり、さらには条約改正の条件に関して農商務大臣谷干城^{たにたてき}やフランスの法学者であるポアソナードなど政府内外から

“国家主権の侵害である”という批判を受け、1886 (明治 19) 年に起こったノルマントン号事件の影響もあって井上は外務大臣を辞することになりました。



ポアソナード
(1825~1910)



谷干城
(1837~1911)



ノルマントン号事件の様子

つまり、明治政府 (それは藩閥主導の政府であった) が進める欧化主義が極端であり、迎合的であり、

表面的であったことが“国家主権の侵害”につながるのではないかとこの危惧が、欧化主義への反発として現れたということができるといえるでしょう。

(2) 反発の内容一様な方向一

それでは次に欧化主義への反発の内容をみていくことにしましょう。反発の内容に関しては、問題文に添えられている年表が手がかりとなりますので、まずは年表の項目を『日本史B用語集』(山川出版)を参考にそれぞれみていくことにしましょう。

民友社 (徳富蘇峰ら)、	
雑誌『国民之友』を創刊	……①
東京美術学校設立	……②
三大事件建白運動	……③
政教社 (三宅雪嶺・志賀重昂ら)、	
雑誌『日本人』を創刊	……④

①

民友社

1887 年、徳富蘇峰らが設立。雑誌『国民之友』を発刊して平民主義を主唱。明治 20 年代の文壇にも影響を及ぼした。1941 年まで存続した。

平民 (的欧化) 主義

鹿鳴館に代表される貴族的・表面的な欧化主義や保守的な国粹主義を排して、平民 (地方の実業家) による生産的社会的建設と近代化 (欧化) を達成しようとする思想。徳富蘇峰が提唱した。



徳富蘇峰
(1863~1957)

②

東京美術学校

1887 年 10 月岡倉天心らの尽力で設立、東京の上野に 89 年開校。絵画 (日本画)・彫刻・美術工芸の 3 科、96 年に西洋画科などを増設。1949 年東京芸術大学となる。

強者の戦略

岡倉天心

本名覚三。フェノロサと東京美術学校を設立、校長となる。のち日本美術院を設立。この間、狩野芳崖・橋本雅邦らと西洋画の手法を加えた新日本創作運動を進めた。インド・欧米に旅し、『東洋の思想』『日本の目覚め』『茶の本』などを英文で出版し、東洋文化の優秀性を説く。



岡倉天心
(1863~1913)

③

三大事件建白運動

1887年の反政府運動。井上外相の条約改正への反対運動に端を発し、片岡健吉ら民権派が言論の自由、地租軽減、外交失策挽回（条約改正）の3項を主張する建白書を元老院に提出。各地の有志も続々上京して高揚したが、保安条例で鎮静化した。

④

政教社

政府の欧化主義を批判し、国粹保存を唱える思想結社。1888年、三宅雪嶺・杉浦重剛らが設立。雑誌『日本人』を発行。明治中期頃が最盛期。

国粹（保存）主義

日本的な伝統・美意識を強調する傾向。欧化政策に対する批判として、明治20年代から盛んになり、民族主義・国家主義に傾斜した。



三宅雪嶺
(1860~1945)

さて、問題文には「政治と文化の両面で…」とあるので、①～④を分類してみます。すると③が政治、②が文化面での反発であることはすぐに分かりますね。つまり、③の三大事件建白運動は井上外交による“国家主権の侵害”、さらには当時の藩閥政府に対する政治批判であり、一方、②の岡倉天心を中心

とした美術運動が、西洋美術偏重に対して、日本美術の再評価を行おうとした運動であることはわかります。

そして、残るは①と④ですが、これは政治とも文化ともとれますので、扱いが難しいのですが、ただ①と④を対比した時、問題文にある「方向の違いをふくみながら」という表現が生きてきます。つまり①の徳富蘇峰は「鹿鳴館に代表される貴族的・表面的な欧化主義や保守的な国粹主義を排して、平民(地方の実業家)による生産的社会的建設と近代化(欧化)を達成しようとしたのに対し、④の三宅雪嶺らは欧化を目指すのではなく日本の伝統・美意識を基にした価値観(これを三宅雪嶺は“真・善・美”と説明した)によって国民国家を建設しようとしたのです。この両者の欧化をめぐる方向性の違いは是非指摘したいところですね。

(3) 反発の背景—国民意識の高揚—

最後に上述の背景について考えてみましょう。①～④はそれぞれ方向性の違いはありましたが、国民意識(ナショナリズム)の高揚がみられたという点では共通していました。ではなぜ、この時期に国民意識の高揚がみられたのでしょうか？

1880年代の出来事を考えてみると、例えば朝鮮では壬午事変・甲申事変などの朝鮮問題や清仏戦争など東アジアにおいて外交的な問題がおこりました。これらが日本国民の対外的な危機意識を高め、そこに極端な欧化主義に基づく条約改正交渉が行われたことで、一気に国民意識(ナショナリズム)が高揚したと考えられます。また国内に目を転じたときに、自由民権運動が国民形成の政治運動として展開していく一方で、藩閥主導の立憲体制が確立しようとする軋轢あつれきが、国民意識をさらに高めていったとも考えられます。

さて、以上をまとめて解答を作成してみましょう。

強者の戦略

【解答例】

対外的な危機意識から国民意識が高揚したことを背景に、藩閥主導の表面的な欧化主義への批判が展開された。三大事件建白運動では民権派が国家主権の確立を主張する一方、岡倉天心は東京美術学校を中心に日本美術の再評価を目指した。また、徳富蘇峰は平民的欧化主義を主張し、地方の実業家を中心とした近代化の達成を唱え、三宅雪嶺は日本の伝統・美意識を基にした国粹保存主義を唱えた。(180字)

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「これではだめなのか?」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はここまでにいたしましょう。ここまで4回にわたって東大の2010年度の問題をみてきましたが、2009年度同様、どの問題も教科書の内容を基本に置きながらも、教科書には十分に記述しきれていないような歴史学的な見地に立った出題でした。さらに2010年度はより問題文・資料から正確に情報を読み取る力が試されていたように思います。それ故になかなか事前に対策が立てにくいものの、問題を解いていくときの面白さは、他の大学にはないものかもしれませんね。

さあ、今年度はどのような出題がされるのでしょうか?今から楽しみですね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに!!